

(聖書箇所)	* 主の御業を賛美する詩編
詩編	111.01 ハレルヤ。私は心を尽くして主に感謝しよう。直ぐな人のつどいと集会において。 「ハレルヤ」=「halal(賛美する)」の命令形+「yahawe)」
	111.02 主のみわざは偉大で、みわざを喜ぶすべての人々に尋ね求められる。
	111.03 そのみわざは尊厳と威光。その義は永遠に堅く立つ。
	111.04 主は、その奇しいわざを記念とされた。主は憤り深く、あわれみ深く、
新共同訳	111.04 主は驚くべき御業を記念するよう定められた。主は恵み深く憐れみに富み
マタイ	15.22 すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」 「あわれんでください」 have compassion, show mercy, pity
	20.30 すると、道ばたにすわっていたふたりの盲人が、イエスが通られると聞いて、叫んで言った。「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ。」
	20.31 そこで、群衆は彼らを黙らせようとして、たしなめたが、彼らはますます、「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ」と呼び立てた。
	111.05 主を恐れる者に食べ物を与え、その契約をこしえに覚えておられる。
	111.06 異邦の民のゆずりの地を、ご自分の民に与え、彼らに、そのみわざの力を告知せられた。
	111.07 御手のわざは真実、公正、そのすべての戒めは確かである。
	111.08 それらは世々限りなく保たれ、まことと正しさをもって行われる。
	111.09 主は、御民に贖いを送り、ご自分の契約をこしえに定められた。主の御名は聖であり、おそれおおい。
	111.10 主を恐れることは、知恵の初め。これを行う人はみな、良い明察を得る。主の誓いは永遠に堅く立つ。
箴言	1.07 主を恐れることは知恵の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。 9.10 主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである。
ヨブ	28.28 こうして、神は人に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。」
協会共同	111.01 ハレルヤ。私は心を尽くして主に感謝を献げる／正しい人々の集い、会衆の中で。 111.02 主の業は偉大／それを喜びとするすべての人が求めるもの。 111.03 その働きは威厳と輝き／その正義はいつまでも続く。 111.04 主は奇しき業を記念するよう定めた。／主は恵みに満ち、憐れみ深い。 111.05 ご自分を畏れる人々に糧を与え／こしえに契約を心に留める。 111.06 御業の力をその民に知らせ／国々の受け継いだ地を彼らに与えた。 111.07 御手の業はまことと公正／その論はすべて真実。 111.08 これらは代々こしえに支えられ／まことと正しさをもって行われる。 111.09 主はその民を贖い／契約をこしえに定めた。／その名は聖であり、畏るべきもの。 111.10 主を畏れることは知恵の初め／これを行う人は皆、優れた思慮を得る。／主の賛美はいつまでも続く。

*****	
(ヘブル語「畏れ」と「驚き」の同時出現詩編)	口語訳による 上段「恐れ=畏れ」、下段「くすしみ=驚くべき」
詩編	31.19 あなたを恐れる者のためにたくわえ、あなたに寄り頼む者のために／人の子らの前に施されたあなたの恵みは／いかに大いなるものでしょう。
	31.21 主はほむべきかな、包圍された町のようにわたしが困まれたとき、主は驚くばかりに、いつくしみをわたしに示された。
詩編	40.03 主は新しい歌をわたしの口に授け、われらの神にささげるさんびの歌を／わたしの口に授けられた。多くの人はこれを見て恐れ、かつ主に信頼するであろう。
	40.05 わが神、主よ、あなたのかくすしみみわざと、われらを思うみおもいは多くて、くらべうるものはない。わたしはこれを語り述べようとしても／多くて数えることはできない。
詩編	72.04 彼らが、日と月の続くかぎり、代々にわたって、あなたを恐れますように。(新改訳)
詩編	72.18 イスラエルの神、主はほむべきかな。ただ主のみ、くすしみみわざをなされる
	86.11 主よ、あなたの道をわたしに教えてください。わたしはあなたの真理に歩みます。心をひとつにしてみ名を恐れさせてください。
	86.10 あなたは大いなる神で、くすしみみわざをなされます。ただあなたのみ、神でいらせられます。
詩編	89.08 主は聖なる者の会議において恐るべき神、そのまわりにあるすべての者にまさって／大いなる恐るべき者です。
	89.05 主よ、もろもろの天／にあなたのかくすしみみわざをほめたえさせ、聖なる者のつどいで、あなたのまことをほめたえさせてください。
詩編	96.04 主は大いなる神であって、いともほめたうべきもの、もろもろの神にまさって恐るべき者である。
	96.03 もろもろの国の中にその栄光をあらわし、もろもろの民の中にそのくすしみみわざをあらわさ。
詩編	106.22 彼らは、エジプトで大いなる事をなし、ハムの地でくすしみみわざをなし、紅海のほとりで恐るべき事をなされた／救主なる神を忘れた。
	106.07 われらの先祖たちはエジプトにいたとき、あなたのかくすしみみわざに心を留めず、あなたのいつくしみの豊かなのを思わず、紅海で、いと高き神にそむいた。
詩編	111.05 主はおのれを恐れる者に食物を与え、その契約をこしえに心にとめられる
	111.04 主はそのくすしみみわざを記念させられた。主は恵みふかく、あわれみに満ちていられる。
詩編	118.04 主をおそれる者は言え、「そのいつくしみはこしえに絶えることがない」と。
	118.23 これは主のなされた事で／われらの目には驚くべき事である。
詩編	119.63 わたしは、すべてあなたを恐れる者、またあなたのさしを守る者の仲間です。
	119.18 わたしの目を開いて、あなたのおきてのうちの／くすしみ事を見させてください。
詩編	139.14 わたしはあなたをほめたえします。あなたは恐るべく、くすしみ方だからです。あなたのみわざはくすしく、あなたは最もよくわたしを知っておられます。
同一節	145.06 人々はあなたの恐るべきはたらきの勢いを語り、わたしはあなたの大いなることを宣べ伝えます。
詩編	145.05 わたしはあなたの威厳の光栄ある輝きと、あなたのかくすしみみわざとを深く思います。

\*\*\*\*\*

(「驚き」の哲学)

プラトン 驚きは哲学特有の感情であり、哲学は驚きのうちに始まる。  
なぜなら、実にその驚異(タウマゼイン)の情(こころ)こそ知恵を愛し求める者の情なのだからね。つまり、求知(哲学)の始まりはこれよりほかにはないのだ。-

プラトン(紀元前4世紀)『テアイテトス』155d 田中美知太郎訳(強調引用者)

人間がいま哲学し始めるのも、太古の昔はじめて哲学し始めたのも、驚嘆ゆえだからである。  
ただし、驚異することによって人間は、今日でもそうであるがあの最初の場合にもあのように、知恵を愛求し(哲学し)始めたのである。ただしその始めには、ごく身近の不思議な事柄に驚異の念を抱き、それからだいに少しずつ進んで遥かに大きな事象についても疑念を抱くようになったのである。たとえば、月の受ける諸相だの太陽や星の諸態だのについて、あるいはまた全宇宙の生成について。-

アリストテレス(紀元前4世紀)『形而上学』982b 出陣訳(強調引用者)

驚きは知の序曲であって、したがって、現象の原因が解明されれば消失する。 根本的驚嘆

タウマゼイン(希:θαυμάζειν, thaumazein)とは「驚き」、「驚異」、「驚愕」といった意味を持つギリシャ語。  
主に哲学の領域で「知的探求の始まりにある驚異」を表す言葉として使用される。身近な日常の中にある些細な出来事の中に知的理解が及ばない物事を見いだした時、人は自分の周囲すべてが謎・困惑(アポリア)に包まれている感覚を覚える。このとき体験される驚き、驚異、驚愕のことをタウマゼインと言う。  
こうした驚異は精神的高揚を伴う。しかし同時にそれは日常的な世界観の崩壊を予見する不気味さも併せ持っている。それゆえこうした驚異と向き合い続けることは、時に精神的な苦痛を伴う。

九鬼周造 驚きという情は、偶然的なものに対して起る情である。偶然的なものとは同一性から離れているものである。同一性の圏内に在るものに対しては、あたり前のものとして、驚きを感じない。同一性から離れているものに対して、それはあたり前でないから驚くのである。  
——「驚きの情と偶然性」(1939):『偶然と驚きの哲学』九鬼周造(書肆心水)に所収